

奥…当たってる
貴方のじゃ、届かなかったのに

不知〇舞
MAI SHIRANUO

不知〇流忍術・免許皆伝
激く美しい本物のくノ一。
得意技は性技全般だが
彼氏との淡白なセックスで
せっかくのエロい身体は
欲求不満。

他人棒に買かれながら彼氏と電話
抑えられないあえぎ声

何度イカされたら
私の、彼への愛は変わらない……

膣内で射精してもらったことないの！

Icup
極上の身体を隅々まで味わい尽くす

現代に生きるリアルくノ一
寝取られ膣内射精セックスを隠し撮りされ
本人無許可でAVデビュー！！

不知〇舞
MAI SHIRANUO

本人無許可で

AV
デビュー！！

不知〇流忍術
免許皆伝
流派

現代に
生きる
リアル
くノ一

不知〇舞
MAI SHIRANUO

Icup
極上
cup

HS
UTAKATA

彼氏を守るため陵辱者の腰に自らまたがり
太くて長い肉棒を膣内に受け入れる
欲求不満の女体は待望の快楽にあらがえず……

寝取られ
膣内射精セックスを隠し撮りされ

produced by ameoto

監督・男優 King-BOSS

DLC

ADULT CG COLLECTION

49PAGE 希望小売価格 ¥400+税

●今回もAVのパッケージ仕様で制作したサンプル画像です。ただのお遊びかと思いきや
作品を最後まで見ていただける。このAVにつながるというなかなかのおもしろ展開。行き
当たり前のストーリーなのに誰かから牡丹餅の半葉、ということまでぜひお楽しみください。

HS NTR-KUNOICHI
UTAKATA
花街姉妹店 <http://ameotoxkazumi.x.fc2.com/>

7NOYQF0E400LO2SIC

Debut

ADULT
CG
collection

¥400+税

DL-SELL

18歳未満購入禁止
成人限定作品
Z-CH-10X
[A-0000150]

ネ

ト

レ

チ



彼氏に代わって

孕ませ膣内射精セックス

世界中の男が欲情する

不知舞と

NTR KUNOICHI



MAI
WIN

「よっ、日本一!!」

「……なんて言ったら恥ずかしくなっちゃうくらい弱かったわね」

「うぐ……いってえ……くっそ、このアマあ……」

「げほっがは……っ。お前……が、強すぎんだよ……畜生……っ」

「で……? あなた達は弱すぎるけど、ただのゴロツキじゃないでしょ。
何が目的? 私を襲ってどうしようとしたわけ?」

「くう……はあ……てめえが、ボスのお気に入りじゃなけりや
俺らで……ぐう……輪姦しまくって、やったとこだ……ぜえ……っ」

「ふうん……そういうことね。」

そのボスつてのに命令されて、女ひとりを捕まえるためにぞろぞろと。
はあ……大変ねえ、下っ端は……やらしい目で見るな!」

(うっはあ…マジでイイ女じゃねえかよ…たまんねえ。

映像で見ただけでも興奮しちゃったけど、実物はエロさが半端ないわ。女の好みにうるさいボスがご執心なのも当然だぜ、こりゃ)

『せっかくのアンディとのバカンス…でも、このまま放置ってのもね』

(揺れる揺れる…！ こんだけデカイ乳はなかなかお目にかかれねえぞ。

おお…!? こぼれちゃうんじゃないかあ？

(尻も良いなあ、むっちりとした肉付きで…こね回してえ)

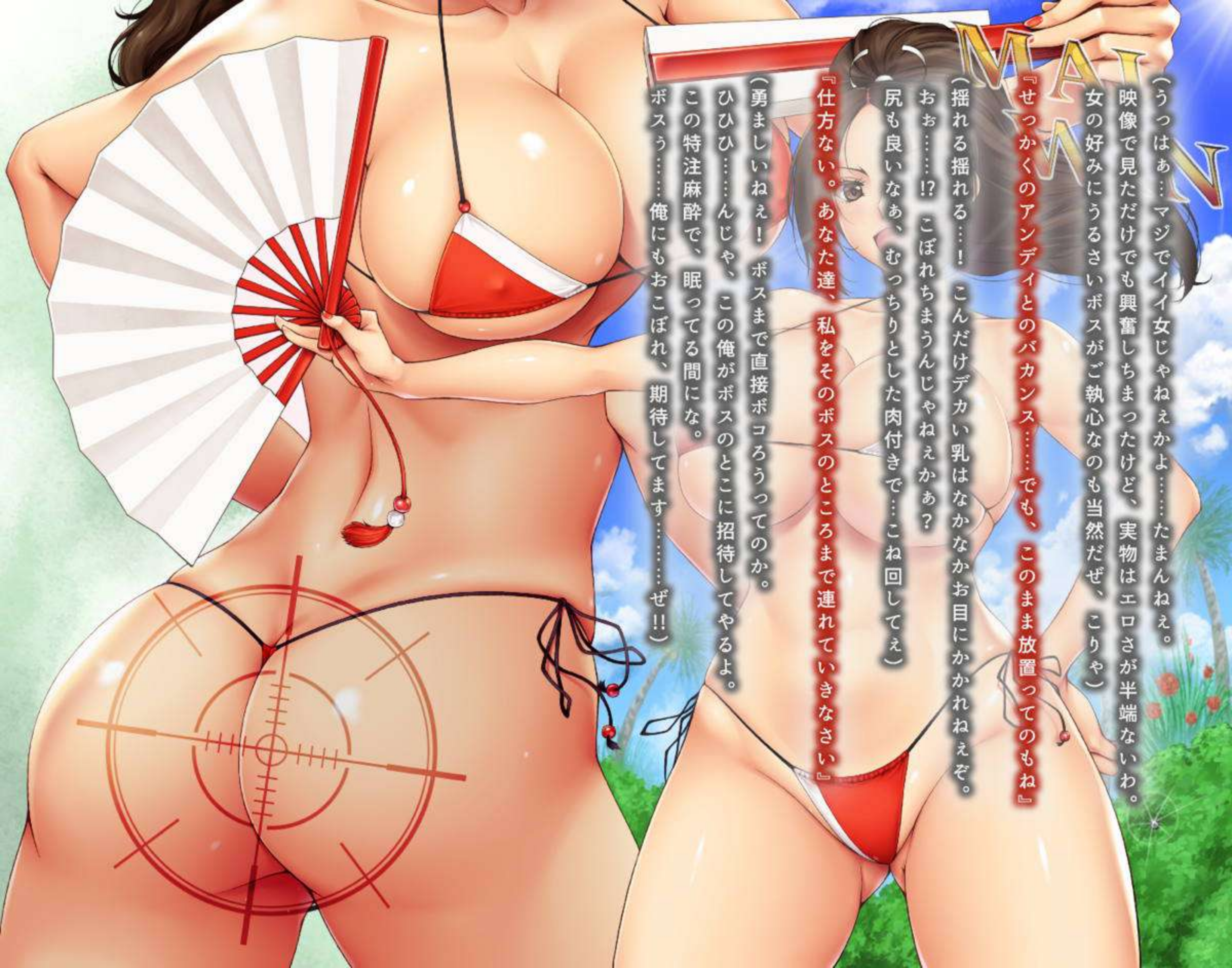
『仕方ない。あなた達、私をそのボスのところまで連れていきなさい』

(勇ましいねえ！ ボスまで直接ポコろうってのか。

ひひひ…んじゃ、この俺がボスのとこに招待してやるよ。

この特注麻酔で、眠ってる間にな。

ボスう…俺にもおこぼれ、期待してます…ぜ!!)



「…………ボス、準備が整いました」

「おう、ご苦労だったな……さがっていいぞ。
ん？なんだ…物欲しそうな面しやがって……くくく。
まあ…こんだけエロい身体だもんなあ？」

「い……いえ……はい。」

正直、もう興奮が抑えられないって感じでして……」

「今回もお前はいい手際だったからな。なに、悪いようにはしねえよ。
俺がたっぷり味わった後になるが……良い思いさせてやる」

「あ、ありがとうございます!!

ボスの器の大きさには毎度……」

「分かった分かった……いいからお前はあの野郎に付け。
抜かるなよ？」

「…………やれやれ、どんな男でもあつという間に夢中にさせちまうとは。
お前のことを知ったあの瞬間から
俺もすっかり虜になっちまったんだぜえ……」

「罪な女だなあ……ジャパニーズ・クノイチ、不知火舞」

「ん……うん……」

「絶対にお前を俺の女にすると決めてよ、色々と企んでたんだぜえ？
それがまさか……そっちの方から俺のシマに入り込んできてくれるとはな。
運命を感じちまったぜ……舞ちゃんよお」

「あ……これ……？ 私、どうしたんだろ……眠って……た？ いつから……？
……誰かの声が、聞こえる。アンディかな……」

「ああっ……実物の不知火舞を前にしちゃ、俺も辛抱たまらん……っ。
さっさと起きて少しは抵抗してみせろよ？ 楽しみ半減だからなあ……！」

「んん……あ、身体……触られてる……？ やだ、もう……アンディってばあ。
珍しく積極的なんだから……。待って、そろそろ……ちゃんと起きる……」

「あ……アン……ディ……？」



『…ツ!? な…え…っ? ああ…!?』

「さっそくお目覚めとは嬉しいねえ。悪いがもう始めてるぜえ。

お前の胸の揉み心地が最高過ぎて…さっつきから指が止まらねえんだわ」

『やっ…いやああ!? ちよ…やめ…やめなさい! んツ…触るなあ…!!』

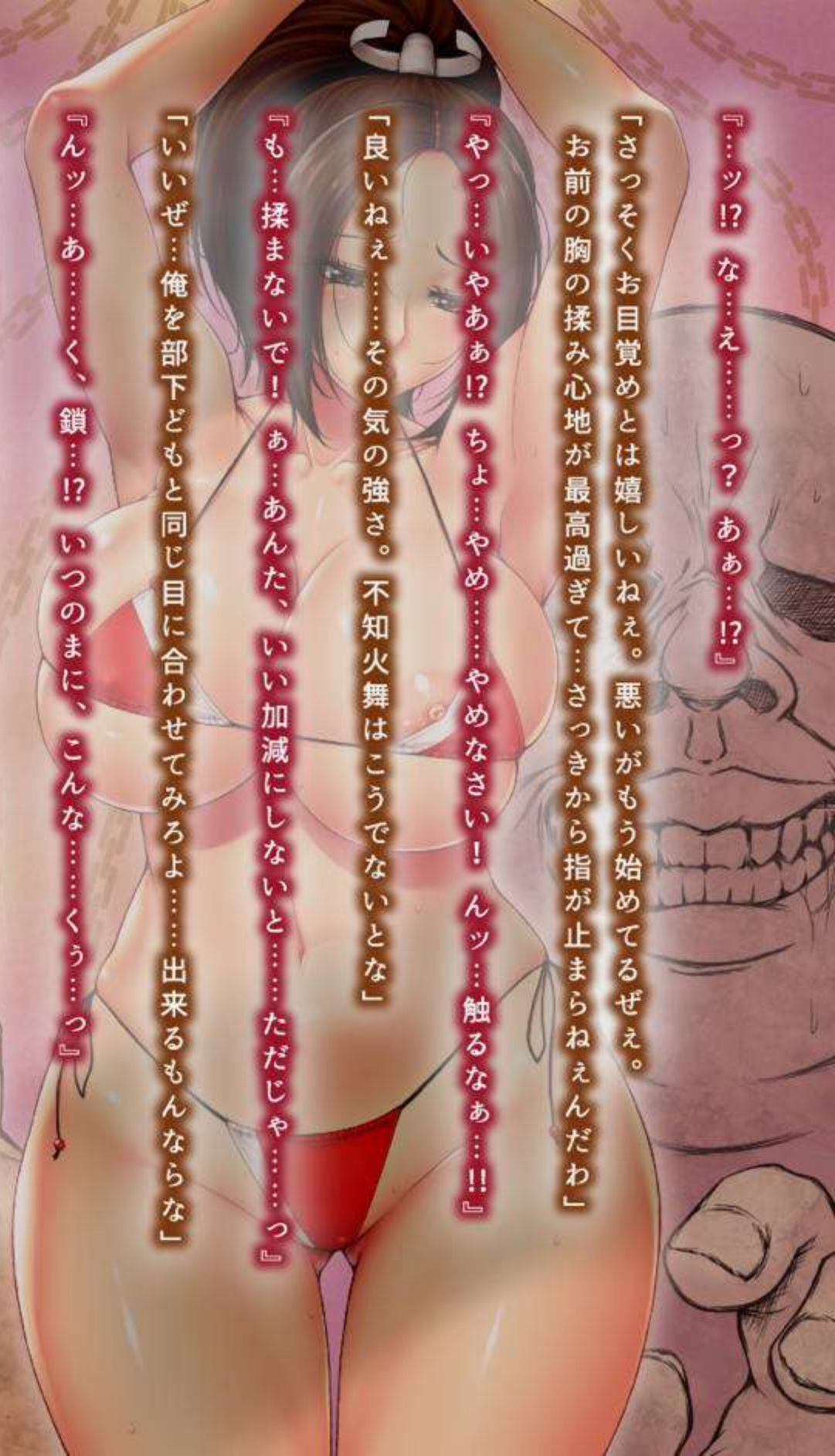
「良いねえ…その気の強さ。不知火舞はこうでないとな」

『も…揉まないで! あ…あんた、いい加減にしないと…ただじゃ…っ』

「いいぜ…俺を部下どもと同じ目に合わせてみるよ…出来るもんならな」

『んツ…あ…く、鎖…!? いつのまに、こんな…くう…っ』

（いったい何がどうなって…部下? それって、あの…ゴロツキ?)



「あんたが…あいつらの言ってたボス…ってこと!? あ…や…ッ」

「ああ…汗の混じった、甘っとろい良い匂いだあ…」

肌の滑らかさも最高だぞ。彼氏のためにケアは欠かさないって感じか？」

「な…!? ア、アンディのことを…知ってるの…?」

「そりゃあ、俺にとっては…恋敵だからな。」

不知火舞のこんなエロい水着姿まで独占できるなんて…羨ましいねえ。だがよ…何で彼氏は、昨夜ヤツてくれなかったんだ？」

「ッ…!? て、適当なこと言わないで…んあッ…この、クズ…!」

「不知火舞のデカ乳を好き放題出来るってのに、がつつかないなんてよ。」

俺には理解できないが、彼氏の余裕ってやつか？」

この重み…柔らかさと指を押し返す弾力…極上のおっぱいなあ」

(こいつ…私が身動きできないからって調子に乗って……っ。
でも、必ず隙が生まれるはず。そのチャンスまで耐えるのよ……舞！)

「それじゃあ……そろそろ、味あわせてもらおうかな」

『は…何を……？ あ、待って…待ちなさい！ そこは……ッ、くん……!？』

「ちゆる…じゅぶ！ れろおお…っ。やっぱり乳首は感じちまうよなあ？
ほれ、良いだろ？ べろ、べろろ…！ ぢゆるう…ちゅばあ……!」

『か、感じてない…わよ！ うんッ♥ や…あんッ……やめて！ ああ…!？』

「その割にはあつという間に乳首が固くなってきたぞ？

もつと吸って、舐めまわして欲しいんだよな？ ほれ…素直になれよ」

『きゃン!? ちよ、引っ張らないで…くい込んじゃ……はン♥ いやあ…!!』



「なあ、彼氏はどんなふうにおっぱいを楽しんでるんだ？」

「なんで、あんたにそんなこと……やあッ!? そんな…ダメ……っ」

（アンディは……私に遠慮して、滅多に胸を揉んだりしてくれない……。乳首を吸ってくれたことなんか……一度も、無いのに……!）

「……もしかして、彼氏にはこういう愛撫……されたことないのか？」

「ッ!? そ、そんなことないわ……! アンディは……いつも……」

「マジかよ……同じ男として信じられねえぜ。」

仕方ねえから、俺が代わりに舞ちゃんの乳首を味わい尽くしてやるぜ。
ああ、彼氏も知らない舞ちゃんの味……! 最高に上手いぞ!!

「違う、違うからあ……! はぁン!? やめて……いや、激し……だめええ!!」



『はあ…はあ…はああ…。』

ああ…こんなもの、おかしい。アンディ…私…』

「くくく…あの不知火舞が、乳首だけでここまでとろけるとはなあ」

(感じてない…気持ち良くななんか、ない…私は、アンディだけの…)

「んじゃ…次は舞ちゃんにしてもらおうか。」

ちよつと待ってな…今、鎖を外すからよ」

(…えッ？ 鎖、外すの…!?)

はっ…バカな男…身体さえ自由になれば…っ)

『ん…っ、覚悟しなさ…んあ…!? ああ…はあ…なんで…?』

「残念だったなあ舞ちゃん、身体に力が入らねえだろ？」

まだ麻酔が残ってるってのもあるが…

乳首責めであんだけ感じちまえばなあ」

『ち、違う…私はそんな…! 嘘よ…ああ…もう…っ』



「くくく……じゃあ、今度は俺を気持ち良くしてくれよ。ほれ……！」

『ひっ……!? やっ……汚いモノ近づけないで! いやあ……!! んん……ッ』

「ひでえなあ、彼氏にも同じモノがついてんだらうが。」

「もしかして……俺のがよっぽど立派だったんで、驚いちゃったかあ?」

『そんなわけ、ないでしょ……! アンディのは……こんな……こんな……』

「なら、よおく見て彼氏のと比べてくれよ。どっちの方が舞ちゃん好みか」

『こ、好みっ……で。あ……はあ……んああ……』

(アンディのは……こいつのみたいに凶悪な……形は……してない。

先端の段差はもつと低いし……表面のぼこぼこした血管も……少ないわ。

なにより……この、全体的にパンパンに張りつめた感じが……)

「くわえて良いんだぜ？もし俺をイカせられたら……解放してやる」

『はあ……はあ……そんなこと、できるわけ……あ……ッ』

(でも、これで終わるなら……こいつに、完全に穢される前に……ッ)

『はむうう……ん……ッ！んっ、んふッ……んちゅ……うん……はあっ……!!』

「おお……!? あの不知火舞が……俺のを！うはあ……感動だぜえ」

『これは……アンデイのため……なんだから……あむう……んッ……んふ……んちゅッ』

(ああ……こんなことになるなら、もっと口でしてあげれば良かった。

アンデイってば私に悪いって……全然ご奉仕させてくれないんだもの)

『あ……はあ……すご……いんんッ、んふ、んッ。ピクピクして……はあん♡』



「おしゃぶりに夢中のとこ悪いが…ぜひパイズリもお願いしたいんだがな」

『……ぶはあ……はあ……はあ……んああ。パイ……ズリ……？』

（私…今こいつの…夢中になってた？ こんな男の…立派なモノに…）

『わ、分かったわ…挟みやすい体勢に…ん…ああッ、胸の間が…熱い♥』

「うほおお…これが世界中の男が憧れる不知火舞のパイズリ…!!
さすがに、上手いもんだな…これで彼氏をイカせまくってんだろ？」

『んッ、うんッ…!! いいから…さっさとイキなさいよ…ほら、ほらあ』

「最っ高お……。そうか、そうか…彼氏はパイズリもさせてくれないのか」

『ッ!? ど、どうでもいいでしょ…んッ、ふうン…早く、イッて!!』



「んほおあ……舞ちやあん……愛のこもった良いご奉仕だったぜえ」

『はあ……はあ、はああ……ッ。』

あ……愛なんて、こめてないわよ！ ああ……なんで……』

(すぐにでも射精しちやいそうな……だらしな顔してたくせに！)

ああ……口の中がこいつの味でいっぱいよ。

胸も熱くてヌルヌル……気持ち、悪い)

「彼氏のよりしゃぶりごたえがあつて、美味かっただろお……舞ちゃん？」

『く……ッ!? そんなわけ……。』

ていうか……あんた「舞ちゃん」なんて馴れ馴れしいのよ!』

「んん？ まあ、そうだなあ。

彼氏よりも先にパイズリしてもらっちゃまったんだし

よそよそしいのはやめにして……

俺も『舞』って呼ばせてもらおうか」

『な……図々しいにもほどがあるわ……!』

そりゃ……胸では、したけど……あれは……。

そもそもあんたなんて、なんでも……あ、ちよつと……何を……!?!』

「やあ…ツ!? そこは、ダメ! んツ…んあ…くうう…うんんツ♥」

「おお!? おいおい…舞のココ、もうトロトロじゃねえか!
乳首責めとご奉仕だけでこんなに濡れちゃうとは…敏感なんだなあ」

「ち、違…!!? うんんツ♥ さ、触らない…で! やツ…んああ…!!?
ひう…ツ!? だ、ダメ…!! 指入れちゃ…ん♥ くうう…んツ」

(あああ、嘘お…。アンデイのためだけのとこに…太い、指があ…!!?)

「すっげえ…指一本でもきつきつだな、舞の膣内は。

熱くて溶かされちまいそうだ。こりゃ、ぶち込むのが楽しみだぜ…」

「はん…♥ ひツ…いいんんツ!? 指…動かさないでえ…んあああツ♥」

「奥から蜜が溢れ出してくるぞ? よっぼどたまってるなあ…こりゃ」

「こんな…膣内、いじられるなんて…久しぶり過ぎてえ…気持ち良…」

「おい、四つん這いになって尻突き出しな…おお、良く見えるぞお」

『ああ…はあ…ああ、見ちゃ…ひやうツ!? あッ…うんん♡ いやあ…!?』

「じゅるっ…じゅちゅ! うめえ!! これが、舞の愛液の味か…!!」

甘酸っぱさとしよっぱさの絶妙なバランスが…ぢゅりゆう…たまらねえ」

『いやっ、いやあ…! そこッ、舐めないで! きやうツ♡ あっ、あああ!』

「おはあ…舞のマ○コ、マ○コお…じゅちゆう…!!」

綺麗な色してるぜえ…舌触りもプリプリで! クリトリスは…どうだ!』

『きゃうンツ♡な、何を…!? あん♡んツ、ああッ!? やっ…あああ!?!
ダメなの…やめて…!! アンディにも…んつくうん…ツ♡』

「くくく…：彼氏はマジで超のつく奥手みたいだなあ。

このマ○コの色の透明感…！
本当にたまにしか抱いてもらってないんだろ？」

『はあ…はあ…：ど、どうだっていいでしょ…：』

「次に抱いてくれるのが、いつになるのかもわからねえのに
ヒダの隅々まで丁寧に洗って待ってるってわけか…：
健気だなあ、舞。

でも悪いな…：彼氏よりも先にマ○コを味あわせてもらっちゃまってよ」

（アンディだけのための大切なトコロなのに
こんな男に、舐められるなんて…：）

『あ、あんたに何をされたって

私の…アンディへの愛は変わらないわ！

それに、アンディなら連絡がつかない私を心配して
探してくれてるはず…：。

すぐにでもあんたの存在を知って、ここに助けに来てくれるわよ！』

「良いねえ、その気丈さ。

俺は舞のそういうところが好きなんだ…：ぐふふふ」

「良いベッドだろ？ お前と愛し合う時のために用意したんだ」

「別に、たいしたこと無いわ……んっ……いや、離して……！」

（ああ……ベッドまで簡単に連れ込まれちゃうなんて……でも、何がなんでも抵抗してみせる……だからアンディ……お願い……！！）

「そうそう……良いこと教えてやるよ、舞。」

愛しの彼氏な、実は泊まってるホテルの部屋に閉じ込められてるんだぜ」

「え……っ？ う、嘘よ……そんなこと、あるわけ……！」

「あそこは俺の息がかかったホテルでな……電子ロックがよく壊れるんだ。で……俺の指示があれば大勢の部下がいつでも部屋に殴りこむ」

「ア、アンディなら……あんなゴロツキが何人相手だって……！」



「くくく…もちろん、お前に使った麻酔を持たせてるさ。

いくら凄腕の格闘家でも強力な眠気に耐えながら、まともに戦えるか？」

（こんなの、全部はつたりの可能性だって…ああ、でも…本当だったら）

「つまり、彼氏の命の保証は…舞、お前次第ってわけだ…よつとお…」

『ツ…!? あ…す、凄い…』

（こいつの…さっきよりさらに大きくなって…そ、そそり立ってる…）

「またがれ、舞。そうだ…さあ…後はどうすればいいか、分かるよな？」

『んツ…アンディには、絶対に手を出さないって…約束して』

「ああ…彼氏を言い訳にしてたっぷり愛し合おうぜ。ほれ、欲しいんだろ？」

（違う…！）これはアンディを守るために…仕方なく…ああ…熱い。
こんな大きいの初めて……本当に私の膣内に挿入するの…？）

『んんツ……あつ、ああツ…！？ そんな…挿入っちゃうう!? んああツ♥』

「くうおお…!? ついに俺のが、不知火舞の…膣内に…!!」

『や、やああ……!? 奥まで、奥まで…来ちゃう!? こんなもの…つてえ♥』

（こんな最低の男のモノなのに…私のナカ、簡単に受け入れちゃってる。
アンディのじゃ届かなかった、深い…ところまで……!?）

「く、くふう…こりやあ、すげえぜ…俺のデカチンを根元まで…
身体の相性も抜群かあ？ 舞…彼氏のと比べてどうよ!?」

『はああ…ツ、ああ…!! ふ…ふん……「この程度？」…つて感じよツ』



(信じられない……アンディとつながる時と、全然違うう……!!
アンディのより……ずっと太くて長いモノが……私のナカを押し広げてる。
嫌で嫌でたまらないはずなのに……身体も心も、幸せに……)

「そうかあ？ なら、もっと俺のを膣内で味わいな……!!」

『きゃうん♡ ま、待って……んああッ!? まだ、動かしちゃ……ダメえ♡』

「くうおお……きつつう……たまらねえ締め付けだぞ、舞!」

『あッ、ああ……つ、はあん♡ お願い……ゆっくりりっ……ゆっくりりしてえ……!』

「おら……! 舞! お前も動け、腰をくねらせて……おっぱい揺らせよ!
凄え、大迫力だあ。この胸も、今日から俺だけのモノに……!!」

『違う……違うう! 私の身体は、全部アンディの……アンディのお……♡』



『あッ…あっ…ん…んあ♥』

ごめんなさい、アンデイ…私…：こんなあ!? はあ…んんッ♥』

「うひひひ…：さすが、良い腰使いだぜえ…舞。

クノイチってのはセックスのトレーニングもするんだよなあ?」

『そんなの…するわけ…：あッ!? い、いつの…時代の話よ…：あん♥
やああ…アンデイ…アンデイい…：』

(しっかりするのよ…舞。

これは、アンデイのため…アンデイを守るためなの!

ああ…なのに…：凄い、これ…私の気持ち良いところ…：全部…ッ)

「まったく…今お前を抱いてるのは俺なのになあ。

くくく、そんなに彼氏のことばかりなら

…：話をさせてやろうか?」

『うんんッ、あん…：はん…：♥ どうしよ…腰、止まらなッ…：』

え…えッ!? あ…：それ、私の…?』

「すげえ着信数だなあ。

全部彼氏からだぞ…：お、また良いタイミングで…：」



「よっぽど心配してるみたいだな……声聞かせて安心させてやれよ」

「待って…待って、ダメ…!! こんな状況で、アンディと話なんて……」

【ッ……舞? 舞…!?!】

「悪いがもうつながっちゃった。ほれ…! 愛しの彼氏だぜえ?」

『んツ…あ、くう…ン?! はあ…はあ…はあ…ア、アンディ…?』

【舞…! ああ、ようやくつながった! 何度かけても出ないから……】

（ああ…アンディ……アンディの声だ……無事、なのね……）

【……で、鍵の故障だというんだけど…なんだか嫌な胸騒ぎがしてね。君とも連絡がつかないから、何かあったんじゃないかと心配で】



「……わ、私は大丈夫！ スマホの電源入れ忘れちゃってて、ごめんね？」

【そうだったのか…なら良かった。それで、君は今どこに…？】

「え…っ!? あ、それは…その…ええっと…ここは…うんんッ…!!
や…そんな…あんッ♥くう…んっ、んッ、んん…ッ」

【舞？ どうかしたのか？】

「なっ…なんでもないの！ うん…! き、気にしないで…!!
ね…や、やめて…っ。アンデイに変な声…聞かれちゃう…ッ」

「おっ…ほお…さっきより締め付けが良くなってろぞお…舞。
ぐひひ…我慢しないで聞かせてやればいいじゃねえか…ほれ、鳴けよ」

【……？ 舞、誰か近くに居るのかい？】

『ッ!? い、いないわ! んッ…じゃあ、私もホテルに…
フロントに言って…すぐに鍵を……はン♡ んん…ダメ……ッ、や…!』

【舞? 息が荒いぞ…本当に大丈夫なんだよな?】

それに……なにか妙な音が聞こえる気がするんだが】

「まさか自分の彼女の尻と、俺の腰が当たってる音だとは思わんだろうなあ」

『黙ってて……ッ、あン♡ んッ、うんっ、んんッ!? は、激し…くうン♡』

(嫌…凄い……だめ、気持ち良い。熱くて硬いモノにかき回されて…。
ごめんなさい……あなた以外の男に、私…!)

【やっぱり君、様子が変わぞ!? 何かトラブルに……】

『大…丈夫……! うんッ!? 何も、問題ない……んッ、んッ、ん…ッ♡』

「お…おほお…こりゃ、たまらんわっ。膣内がからみついてくるぞ…っ。
うねりがっ…そこらの女とは桁違いだ…ぐうお…!」

「くう……んん!? やッ…やめ……あん♡ん…ツ、あ…んあ♡んつくうう
あッ…アンデイ……どうしよ!? 私……ツ、イツちゃ……」

「通話を切るなよ。切ったら彼氏を襲わせて…膣内射精だ!」

「ッ!? それは…ダメっ…絶対だめえ…ッ!」

【ま、舞…っ? 舞……!?!】

（嫌…いやあ…許してアンデイ! 私…こんな男にイカされちゃう……!）

『んッ…んああ!? お、お願い……アンデイ、聞かないでえ…!』

やあ……ん♡んッ、んんッ…んんんッ♡イツくううう……んんッ♡』

『…………ん…っ、んんッ…んああ……………♡
あ、ああ……………はあ…はあ…はあ……………はああ……………♡』

【舞…！ どうしたんだ!? 返事をしてくれ……………!!】

(アンディ……………私、イカされちゃったの。
……………初めてのの、男のモノで。

私ね…あなたとのセックスじゃ……………イッたこと、無かったのに……………)

【今の声、普通じゃなかったぞ!?
やっぱり誰かいるんじゃない!? 誰だ! 舞に何をしている!?!】

「おいおい、何って……………まさか気づいてないのかあ?
ったく…まあ良かったな、舞。
にしても、お前の彼氏は超奥手でさらに超のつく鈍感野郎なのか?」

(あなたに抱かれるの
とても幸せで…それで十分だった……………なのに
この男の……………たくましいモノに貫かれて、思い出しちゃった)

『ああ……………アンディ…セックスってこんなに、気持ち良かったのね』

【……？ すまない舞っ……よく聞こえないんだ！】

「あー……もしもし？ ええ……と、アンディ……ポガードさんでしたかな？」

【っ……!? 何者だ……!?】

「私？ 大ファンですよ舞さんの……ずっと彼女を応援しております」

【ファン……だと？ なぜただのファンが舞と一緒に……。】

【それより、あの悲鳴のような声はなんだ!? 彼女に何をした!?】

「いやあ……偶然舞さんをお見かけしましてな。」

【嬉しさのあまり、私が趣味にしているスポーツにお誘いしましてね。ほれ、続きを……今度は立って……そう、行くぞ……!】

【お、おい待て……スポーツだと!? 彼女は嫌がって……】

「はあん………ツ♥ ああ……んっ!? いや………こんな、体勢で……ツ」

「嫌がる? 彼女はずいぶんと楽しんでるようですが………おっほお………私も憧れの舞さん相手に、白熱してしまってますなあ………!」

「あッ……あああッ!? 奥……グリグリしちや………ダメえ………あッ………良い♥」

「っ!? お前、いったい彼女と何をしてるんだ!? 本当のことを………」

「だからスポーツだよ。男女でやる大人のスポーツさ………なあ、舞」

「ン……あッ……ああ………えっ? ま、まだアンディと………!」

「やあッ………息、整えさせてツ………ん………♥ 今だけ、お願い………動かないで。はあ………はあ………アンディ? そう………スポーツ、だから………!」

「舞………! いや、しかし………君の声はとてもつらそうというか」

「う、うん……！ 全身を使った……あッ、結構激しいスポーツ……なのッ。
この人とても上手でッ……私圧倒されちゃって……んんッ♡」

「いやしかし、さすがに舞さんは筋が良いですよ。

私も気を抜くと……あまりの締め付けの良さに、負けてしまいそうになる」

【締め、付け……？ な、なあ舞……その男との距離が、近くないか……？】

「そう……なの……んッ♡ダブルベッドくらいの、範囲で……してるから」

「互いの絆を深めるため、身体を密着させてやるのがルールなんですよ」

「あッ……!? だから、アンディ……心配しないで……ふああッ♡

うんん……ッ♡ やあ……そこ、いやっ……そこ、そこッ……そこお……♡」

【……み、密着って。舞……まさかとは思うが……あの、水着のままか……？】

『そ、それは……あ……寝るの……？ん、ああッ……また、挿入って……♡』

「おっ……おっお……！ すっかり、俺のモノに馴染んだなあ……舞？」

【どうしたんだ……舞……！！ 舞……!?!】

『んッ……はああ……た、態勢を変えただけ……だから……やッ、いやあ……ン♡』

【舞……答えてくれ。あの……水着のまま、男と2人きりで……?】

「なあに、ご心配なく。あんな過激な水着姿のままお誘いはしませんよ」

『ああッ……うん♡ や……ひうッ!? そうよ……アンディ以外に、あんな……』

「そう……あんな格好でこのスポーツは出来ませんからなあ。

全部脱がせて……生まれたままの姿の舞さんと楽しませてもらってますよ？」



【な……!? ほ、本当なのか……舞!! つ!? 貴様! 舞から離れる……!!】

「そうわめくなよ。お前の彼女はいつも裸同然の恰好で戦ってるだろ?」

【そういう問題じゃない!! 女性を裸にして、一方的に危害を……】

「なあ、舞。どうも彼氏はまだ分かってないみたいだなあ?」

「ア、アンディと……する時は、私……こんな声っ、出ないからあ……!」

あえぎ、声……分からないの……かも……ツ。んつくうん♥」

「くははは……! 本当に呆れさせてくれるなあ……彼氏さんよ。」

せつかくだ、舞……お前が教えてやれよ。俺たちが、何をしてるのか」

『え……ツ!? あっ……ああツ♥ そ、そんなの……無理い……んツ、んんんあ……♥
いくら……ヤツ、なんでも……私からなんて……あんツ!?』



「なら…俺に抱かれながら、いたぶられる彼氏のうめき声でも聞くか？」

【おい！ 舞と何を話している…!? くそ……とにかく、この部屋から……】

「ア、アンディ…？ 私ね…あッ……今、挿入れられ…ちやってるの……ッ」

【舞……!? 入れられてる……って、どういうことだ…!?】

「こ、この人の……熱くて、硬いモノを…私の、な…膣内にい…うんッ♡」

【君の、なか…？ 舞、いったい何を言ってるんだ!? まさか…薬物……!?】

「鈍感も極まれば、傑作だなあ。おい…はつきり言ってやったらどうだ？」

『なっ…膣内、だってばあ！ あッ♡ お…おま……おま○こ……の……なかああ！
お、おち○ちんが挿入ってるの！ セックスしちやってるの……ッ!!』

【……………え？ま、舞……………？】

今…なんて…な、なあ…今…あ、ああ…ああ…つ!?!】

「悪いな、残念野郎。」

お前に代わって舞の身体を堪能させてもらってるぜ。

極上の締め付けだよなあ舞のマ○コは…お前にはもったいねえ」

【き…っ、貴様あ!! 舞に……………! 舞に触れるな…!!】

舞っ、舞いー!!】

「いまさらだな…俺たちはもうすでにたっぷり愛し合ったんだぞ。舞の極上おっぱい揉みしだかせてもらってよお。

乳首はすげえ敏感で良い味だよな。

直接触ってやる前からマ○コはトロトロの濡れまくりで

舞の愛液は美味かったぜえ…ま、彼氏なら知ってるわなあ?」

【あ…愛、液…? 美味…かった!?!】

そんな…舞が、貴様などに…無理矢理っ、無理矢理だろう!?!】

「まあ、最初はそうだったけど…な。

だが舞は自分から俺のチ○コに丁寧なご奉仕をしてくれたぜ?

俺のをくわえて念入りにしゃぶる

舞の舌づかいは気持ち良かったなあ…くくく。

パイズリも最高だったぞ…分かるよな? パイズリ。

あの不知火舞が自慢の巨乳で俺のを挟んで…うへへへ。

思い出しただけで涎がでちまう。

あれをいつでも楽しめるとは…彼氏は羨ましいねえ」

【だ、黙れっ…黙れえ!! 舞っ…嘘だ…君がそんなこと…!!】

『んッ…ああ…ん!? ア、アンディ…アンディ…! 許してッ…あん♥』

「どうやら舞は、お前より俺のチ○コの方が好きみたいだからな。そうだろ…舞。彼氏のじゃ欲求不満だったんだろ?」

『ちっ…違う! 違う…違うの…! 私はアンディが…ああッ♥ 凄お…い♥ アンディのじゃ…こんな、感じないけど…!』

【ま……舞……!!?】

「舞のエロい身体が貧相なチ○コで満足できるわけないよなあ。安心しろ…これからは俺が濃密に愛してやるからよ!」

『くうう…ん♥ あッ…うああ!? 激し……良いのッ、ん♥ ふああ♥』



（ああ…気持ち良すぎる…アンデイのとは、比べ物にならない。
でも…それでも…あなたへの愛は変わ…）

『あッ、あッ、はッ…ああ♥んッ…んんん!? やッ、ダメエ…は♥』

【舞…舞い…!】

「おい…いい加減、俺の女を気安く呼び捨てにしないでもらいたいな」

【だ、誰が…貴様の、女だと…!? 舞は…】

「次に舞と呼んだら…俺の精液を、このきついマ○コの中に注ぎ込む」

【っ!? ま、待て…それだけは…!】

「分かったら黙って、舞の喘ぎ声を楽しみんだな…くくくく」

「あん……♡ 凄いつ……凄いいい♡ こんな……激しくされたらあ……んっくう!？」

「おおっ……おほお……舞い、お前の膣内も……凄いぞお……!？」
締め付けに……俺のがねじ曲げられそうだ……くうおおお……おら！ おらあ!!」

「きやう……っ!？ あっ……ああ……♡ こ……これ!？ あ、当たってる……!？」
あああ♡ 私の身体、悦んで……!？ やっ……ダメ、だめっ……ダメエ……♡」

「くうう……!？ なあっ、元カレさんよお……舞のは最上級の名器だよなあ!？」
キツキツのトロットロで……なんで、ヤリまくらねえんだ!？」

「んああああ……っ♡ アン……デイト……もっとお、あん♡ やああ……っ!？」

【もう……やめてくれ……頼む、から……】

「今更後悔しても遅いぜ？ もう、舞の膣内は俺専用なんでなあ……!!」



『そんなこと…無いッ!? んッ…はん♥そこは、アンディだけの……!!』

(なのに……アンディの、よく思い出せない。この人のが、立派過ぎて♥)

「どうしても、俺の舞とヤリたくなったら…ネットの動画を使いな。

あのセクシーなクノイチスタイルで戦う舞の隠し撮り映像が溢れてるぜ。
ブルンブルン揺れる胸を見ながら、ひとり寂しくヌクんだなあ」

『あッ…ああん♥ダメッ…良いの♥だめえ!? あっ、あッ、あ…ああッ♥』

「もちろんその間も、俺はこうして…舞と愛し合わせてもらうが、なっ!」

【あっ…ああああ…ううあああっ……】

『んんッ♥くうん…はッ…ああ!? 奥ばかりい…あん♥
やッ…ああ…また大きく♥ビクビクして…あ!? これ…つてえ!』

「うほおああ…っ、へ…へへっ…分かるかあ、舞？」

お前の膈内の具合が良すぎて…そろそろ、射精ちまいそうだあ…！」

「ッ!? やッ…あっ、ああ…ッ♥ちや…ちやんとっ…そ、膈外に…ッ！」

「普段の俺なら、もっとたっぷり楽しませてやれるんだけどな。」

相手が不知火舞じゃ…さすがに、長くはもたねえか…うへへへ…」

「あ…ッ、んあ…♥き、聞いてるの!? はン♥膈内に射精すのは…ッ」

「おっ…ふお…っ。まあ…射精す直前に抜けるか、どうかだなあ」

「あッ…アンデイにも、まだ…膈内で射精してもらったこと…ないの！
だから…あっ…うああッ♥やっ…いやああ…ッ♥」

「はっ…はっ…ふうお…なら、ずっと膈内射精を待ち望んでたわけか」



『そ、そんなこと…!? あん♡ やッ、あぁっ…あぁあッ♡』

「ひでえ元カレだなあ！ 舞の子宮はずっと寂しかったみたいだぞ!」

【……………っ!?!】

「舞、感じる！ ここが…お前の子宮の入り口だ…！ おらっ…おらあ…！
俺の子種を欲しがって、吸い付いてくるぞ…おお！ たまらん!!」

『いやあ!? そんなの、知らない…ッ♡ あッ…凄い♡ 良すぎるう……ッ♡
あっ、あぁッ…だめッ、私…また…イ…イツちやい…そおおッ♡』

「くうおおお…!! 俺も…射精すぞお!! 舞っ、舞っ、舞いつ……!!」

『お願い……膈内にはっ、絶対いいッ!? あぁッ、やッ…いやあぁ……ッ♡
ダメっ♡ イツちやう…膈外にッ……膈外っ…あッ、いあぁあぁ…♡』



【っ!! やめろおお!! 舞は俺の…舞は、俺の…!!】

(アン…ディ……!)

「っあ…射精る……っ!!」

『いッ……!! あッ…ああッ、ああああああ……ッ♥』

(あああ…膣内に射精されて……イカされ、ちゃったああ……♥)

「うう…くうう!? 舞のイキマ○コおお…!! うおおおおお……!!」

(凄いい♥ 膣内でドクンドクンして…熱いのがあ…どんどん射精てるう♥
子宮が…この人の精液でいっぱいに……ああ、もっと射精して…ッ♥)

「くうお…!! 欲しがりやがって…おら! 孕めっ…俺ので、孕めえ…!!」

「あ……ッ、んああ……はあッ……ああああ……ッ♥」

「おおお……すげえ……あふれ出てきちゃったぜ。うへ……ぐへへ……」
「膣内射精されて舞の膣内が悦んでるぞ……くほお……まだ、締まるう……」

【舞………!! 舞………!!】

「まだイッたまんまだから、お前の声なんか聞こえねえよ。」

「良いイキっぷりだ……誰かがさんざん焦らしといてくれたおかげだな」

【貴様は……っ、貴様だけは………!!】

「イッてる最中の舞の膣内に射精するのは、これ以上ない気持ち良さだったぜ？
ああ……そうか……お前はイカせたことすらないんだもんな。」

「不知火舞に膣内射精が許される男は世界中でお前だけだったってのに
俺は舞と初セックスで膣内射精して、子宮に種付けだ……羨ましいかあ？」

【うあああああ……っ!?

い、今すぐそこに行くからな!! 覚悟っ、して……………】

「ふうおおおっ……おお、射精たあ。

一度の射精でこれだけの量を射精したのは俺も初めてだ。

舞を孕ませたくて玉の中の子種が頑張ったんだなあ……くくく。

おい元カレ、急がねえとすぐにでも受精しちまうかもだぜ?」

【おおおおお……!! がああ……っ!?

こんな……こんな扉! あああああ……!!】

「どんな馬鹿力だろうと人間が壊せるようなものじゃないんだがな。

さあ……ちよつと惜しいが、一回抜くぜ……舞?」

『ああ……んああ……んんツ♥ あ……はあ、はああ、ああ……ン……♥』

(身体のお……奥の、奥の方が……熱いい……♥

たく……さんの……命……感じるう)

「表情がとろけてるぞお、舞。

やれやれ……これじゃ、お掃除フェラはまだ無理だなあ」

【くそ！くそ！くそおお！！くそおおお！！】

「俺の精液は濃いからな……子宮に注ぎ込んだ分は簡単には出てこないぜ？ぼおつとしてないでかき出さないで……妊娠しちまうぞお」

『はあ……あああ……はあ、はああ……んん♡にん……しん……？やああ……』

「まだ、頭の中フワフワか。なら、俺が代わりにしてやろうか。おお……すげえな……舞の膣内、もうキツチキチだぜ。ほれ、ほれ……！」

『ひやう……!? あん……っ♡んんツ♡あッ……やあ……出ちやううう……♡』

「あ？お……おほお!? うははははは！ここで潮を噴くかよ……？おら……もつと出せ。元カレよお……舞の潮吹き、見たことあるかあ!？」

『あう……♡うん……んんツ♡ああ……ひああ……はん♡はあ……はあ……』



「さあて…舞？ 子宮の中の俺の精液はちゃんと全部出せたかあ？」

「はあ……♡ お腹のナカ…熱いから……まだ、あなたので…いっぱい」
「くくく……待ち望んでた精液…少しも無駄にしたいくないもんな。
でえ？ どうだったよ、俺とのセックスは……？」

「はあ…はああ……ああ…♡♡と…とつても……気持ち、良かったわ…♡」

「チ○コはどうだあ？ あの野郎のに比べて…俺のはよお？」

「や…ああ……アンディのより、あなたの……おち○ちんの、方が……
す……素敵、よ♡ 太くて、長くて……たくましい……はあ…はああ♡
私のこと…とつても、力強く……愛してくれてえ…♡」

【……っ!? そんな…舞…舞っ…ま】



「…………どうだ？少しは頭の中クリアになったか？」

『はあ…はあ……ツ。許…さない……膣内で…射精すなんて……っ』

「お前の膣内がとんでもない強さで締め付けるから、抜けなくてなあ……」

『最…低……！あんななんて…身体さえ、動くようになれば…っ』

「膣内射精してる時の…チ○コに吸い付いてくる舞の膣内…良かったぜえ」

「ッ…!?ど、どんなに…あんたが私を……はあッ、イカせたって……」

私の心は…変えられないっ。私は…ツ、アンディを愛してるんだから！」

「くくく…あれだけ派手にイカされて…膣内射精されて……」

潮まで吹いちまったってのに……その気の強さ…たまらないねえ。

まあ、そうでなくちゃ商品価値が下がるってもんだ」



『……ッ？ な……なによ……商品って……？』

「ああ……気にするなよ。お前はお前らしく、そのままできてくれりゃいい。こっちでちゃんと、上手いことやってくからよ」

『は……？ あんた、私にこれ以上……何を……!?!』

「まあ……まずは、デビュー作なんだか……心配しなくても収録は完璧だぜ」

『で、デビュー……？ 収……録？ な、何……？ 何の話よ……!?!』

「ああそうだ……次回作からも、また元カレに協力してもらおうかね」

『元……って……アンディ!? アンディは……!?!』

「怪我はしてるだろうけど無事だぜ……今頃はぐっすり眠ってるだろうな」



「ほれ……さっさとこれを着な」

『え……？ これ、私の忍び装束……なんで、あんたが……？』

「お前の荷物は全部回収済みなんだよ……早くしろ」

『……ね、せめて……シャワー浴びさせて？』

あ、アソコ……洗わないと』

「これが済んだらな……おい！ 準備しろ!!」

『ッ!? ちょ……こいつら、何を……？』

「撮影の準備だよ。」

パッケージ写真は重要だから、しっかり撮らないとなあ」

『パッケージ……？』

あ、あんた……さっきから本当に何言ってるの……!?

私を……犯すだけじゃ、飽き足らず……まだ……』

『んぐ…んちゅツ……んふ…ちゅう……。
ううえ…はあああ……やあ…髪に…かけないで……っ』

「お掃除フェラも良かったぜえ……よおし、始めな！」

「では、撮影を開始します。じゃあ、まず1枚…目線はこちらにー」

『ね、ねえ…!! これ、何なの!?
撮影って……私に…何をさせるつもりなのよ……!?!』

「お前はな…AVでデビューするんだよ。
俺とのセックスは一部始終、隠しカメラで全部録ってたのさ」

『なツ……!?! そんな…冗談じゃないわ!!
私が、なんで……!?!』

「もちろん名前は出さねえから安心しろって。
でも舞は有名だからな……顔でモロバレかもだけどよ」

『そういう問題じゃ……ないでしょ!?!
エ、AV……なんか……絶対嫌よ……私は……!?!』

「……つたく、お前は俺に逆らえる立場じゃないだろう？」

『くっ……ア、アンディ……!』

「分かったなら、笑いな……! せっかくの美人が台無しだぜ? そうだ、いいねえ……マ○コから精液が染み出してきてるぞお」

「撮りまーす。はい……はーい、どんどん行きますねー」

『あ……ああ……いや……っ、やああ……』

「表情が暗いぞお……パッケージは売り上げに直結するんだからな？」

お……!? 良いぞ……!!
そのきつい目線が、実に不知火舞らしくて良い!!」

(ア……アンディ……私、これからどうなっちゃうんだろう……。
あいつや、他の男たちにも……犯され続ける……の?)

嫌なのに、気持ち良くされちゃう……ああ、お願い……助けて……)





MAI
WIN



















